

社会貢献の功績

- ▶精神的・肉体的な著しい労苦、危険、劣悪な状況に耐え、他に尽くされた功績
- ▶困難な状況の中で黙々と努力し、社会と人間の安寧、幸福のために尽くされた功績
- ▶先駆性、独自性、模範性などを備えた活動により、社会に尽くされた功績



認定 NPO 法人 抱樸
..... 052



特定非営利活動法人
市村自然塾 九州
..... 076



NPO 法人 ボルネオ保全
トラスト・ジャパン
..... 100



小俣 智子
..... 054



特定非営利活動法人 上野丘さつき
家族会 「淡河町ゾーン・パス」
..... 078



松山 倫政
..... 102



社会福祉法人
太陽福祉協会
..... 056



久保田 英朗 /
河野 伸二郎
..... 080



野菊荘
..... 104



水谷 和孝
..... 058



特定非営利活動法人 NPO
スチューデント・サポート・フェイス
..... 082



米谷 新
..... 106



大島町消防団
..... 060



鬼 一二三
..... 084



ポリビア、オガル・ファティマにおける
イエスのカリタス修道女会の邦人シスター達
..... 108



NPO 法人 福島の子どもたち
香川へおいでプロジェクト
..... 062



社会福祉法人
柚の木福祉会
..... 086



浦河べてるの家
..... 110



藤田 裕喜 /
藤田 孝子
..... 064



特定非営利活動法人
日本歯科ボランティア機構
..... 088



社会福祉法人
広島いのちの電話
..... 112



福住町町内会
..... 066



一般社団法人
ホワイトハンズ
..... 090



特定非営利活動法人
ソルト・パヤタス
..... 114



NPO 法人 被災者応援
愛知ボランティアセンター
..... 068



ウィメンズセンター
大阪
..... 092



特定非営利活動法人
グローバルギフトネット
..... 116



りんごラジオ
..... 070



特定非営利活動法人
おきなわ CAP センター
..... 094



宇佐川 照孝 /
宇佐川 秀子
..... 118



特定非営利活動法人 阪神高齢
者・障害者支援ネットワーク
..... 072



武田 純子
..... 096



医療法人 聖粒会
慈恵病院
..... 120



NPO 法人 がんばっと!!
玉浦
..... 074



ほっかいどうタンポポ
玉浦
..... 098

認定 NPO 法人 抱樸



福岡県

昭和63年から北九州市を拠点に「ひとりの路上死も出さない。ひとりでも多く、一日でも早く、路上からの脱出を。ホームレスを生まない社会を創造する」を課題・テーマにホームレス支援活動を行っている。ホームレスには二つの課題があり、一つは「ハウスレス」家が無い、食べるものがないなどの物理的なモノにかけていること。もう一つは「ホームレス」家族や友人との関係性が無く、孤立していること。経済的な面「ハウスレス」のみ支援していても解決にはならないと考え、両面を支援する活動を25年以上にわたり継続している。

(推薦者：社会福祉法人 南高愛隣会)

理事長

奥田 知志

この度の社会貢献者表彰、大変ありがたく、また身の引き締まる思いでいます。

1988年12月、数名のボランティアによって、北九州におけるホームレス支援活動は始まりました。あれから25年以上が経ちました。この活動は、全国の支援者によって支えられてきました。

私たちが関わり自立された人の総数は2,500人を超えました。9割以上の方が自立され、その後も生活を継続されている方は93.3%にのぼります。それは、出会いから看取り（葬儀）までの支援を実施してきたからだと思います。

本来、私たちの活動が長きにわたり必要とされていることは決して喜ばしいことではありません。私たちは、「一日も早い解散を目指し頑張ります」と任意団体からNPO法人となった設立集会時に宣言いたしました。それからすでに14年が過ぎました。残念ながら私たちの活動が不要となるのは、まだ先のように感じています。

活動初期は、路上の方々への支援がすべてでした。今でも支援の中心は変わりません。しかし、不安定な雇用状況、居住形態で生活せざるを得ない方々の数が増大しています。若年化も進んでいます。支援が必要な方は路上生活者だけではありません。

私たちは、三つの使命を掲げて歩んでいます。

- ・ひとりの路上死も出さない
- ・ひとりでも多く、一日でも早く、路上からの脱出を
- ・ホームレスを生まない社会を創造する

三番目の使命である、新しい地域社会の創造を目指した活動が今とくに求められています。私たちは、2014年7月、名称を「抱樸（ほうぼく）」と変更しました。「抱」は、抱く。「樸」は、原木。「原木をそのまま抱き留める」という意味があります。抱樸のテーマは2つです。

第一のテーマは、受容と希望です。整えられてから受け止めるのではなく、山から切り出された原木をそのまま受け止めるということです。その時、希望が生まれます。受け止められた後に、原木は役割を得て、杖や家具となり、他者のために生きようになるのです。受けとめられた者が希望に生きる者となるのです。

第二のテーマは、絆は、傷を含むということです。ささくれ立った原木を、そのまま抱きとめるということは、傷つくことが伴います。しかし、傷ついてでも引き受けてくれる人、地域、社会がまず必要なのです。社会参加、受容的社会こそが、自立を支えます。

社会制度が変遷する中、生活困窮者への支援をどうするかが課題となっています。経済的困窮・社会的孤立状態にある方々への支援はこれからますます必要です。この度の表彰は、皆さまからの励ましと力強い後押しであると思います。かけてくださった期待に十分応えることができるよう、これからも活動を続けてまいります。この度の表彰、誠にありがとうございました。

理事長 奥田 知志



▲新年と夏に無縁のまま亡くなった方を追悼する集会



▲炊き出しの様子



▲炊き出しに来れない方を訪ねるパトロール



▲炊き出しのお弁当や味噌汁、衣類、医薬品などを手渡し



▲炊き出しの場で自立に向けた相談受付

小俣 智子



東京都

平成17年に「小児がんネットワーク みんななかま MN プロジェクト」を都内で設立し、小児がん経験者同士のネットワーク作りのサポート、実態と調査に基づく情報発信、イベントの開催、講演などを行っている。小児がんの治療の成績は上がり、7～8割が治るようになってきたが、その後の進学や就職、結婚などにマイナスとなることがあり、また「晩期合併症」が起きることもある。小俣さん自身も小児がん経験者であり、晩期合併症と向き合いながら、社会の理解を得るため自身の経験を広く訴える必要があると考え、会を設立し活動している。

(推薦者：坂上 和子)

小児がんネットワーク
MN プロジェクト
代表

「続けてきたご褒美」

この度は、素晴らしい賞を賜り誠にありがとうございました。ただただ自分が必要だと思い進めてきたことが、このような形で認めていただき改めて身の引き締まる思いであります。受賞式ではほかの受賞者の方々と交流することができ、今後の活動の糧とすることもできました。重ねて御礼申し上げます。

賞をいただいた今年度は、奇しくも現団体を立ち上げて10年目であり、私にとって大切な節目の年でもあります。立ち上げ当初は、小児がんを経験した仲間たちが、全国各地で自分たちの会を運営し始めた時期でした。それまで自身が行っていた12年間の多くの出会いや様々な活動から、小児がんを経験した仲間が5万人は確実に日本に存在すること、私たちが抱えている問題は仲間や専門職による長期的な支援のしくみが必要なこと、子どものがんはあまり世の中に知られていないことなどがわかってきました。

そして2005年、たくさんの仲間とつながること、支援者を増やし横のつながりを作ること、多くの人に小児がんを知ってもらうことを目的に、小児がんネットワーク みんななかま MN プロジェクトを立ち上げました。この10年間で支援者は400名を超え、つながった小児がんの仲間も100名を超えました。

加えて小児がん支援のしくみとして、がん対策基本法の下に2011年国が小児がん医療・支援体制の構築に取り組み始めました。その拠点として、現在全国に15の小児がん拠点病院が指定されています。このような時代の流れの中で、私たちの声を社会へ発信し構築中の体制づくりに関わっていきたいという目的から、「共に生きよう。小児がん横浜宣言」を80名の小児がん経験者と共に作成し、2012年発出しました。宣言は、1. 小児がんの自分を受け入れる、2. 小児がんを自信に変える、3. 小児がん

を正しく周りに伝える、という3つを私たち（小児がん経験者）ができることとして冒頭に挙げました。そしてこの3つを実現していくために、医療者、教育者、家族、行政、社会への具体的なお願いを述べています。

小児がん経験者の生存率が7～8割と向上する中で、本人への関わり（告知・説明・健康教育など）、就学の地域格差、成人科への移行、発症から成人後までトータルな支援、家族（特に親・きょうだい）への支援、社会保障制度の充実など、継続あるいは新たな課題も浮上しています。私自身は、後進の育成、病気や障がいを越えた「課題解決」中心の支援体制などが今後の取り組み課題となっています。

こういった課題が解消されつつ、この宣言が実現する社会を目指して、さらに次の10年を進んでいきたいと思っています。

最後に、夜空の星になっていた私たちのたくさんの仲間を常に心の中に留めながら、仲間の分まで生きられる限り精一杯生きていこうと思います。



▲高松にて ゴールドリボン啓発イベントで挨拶



▲小児がん啓発シンボルのゴールドリボンをかたどったチャリティーグッズ



▲福岡にて 第二回小児がん経験者交流会 メッセージを掲げる参加者

社会福祉法人 太陽福祉協会



東京都

昭和62年に東京都日の出町に設立された社会福祉法人。創設者が私財を投じて同町に土地を購入し、施設を建てようとしたところ、障がい者に対する誤解から長い間建設できなかった。しかし、創設者を支える多くの若いボランティアたちが敷地内の古民家を利用し、障がい者の宿泊訓練を始めたところ、次第に理解を得られるようになり、施設の開園に至った。利用者は農作業や山作業、作陶などに取り組み、重い知的障がいを持つ利用者も農耕具を操作して活動している。また「ボランティアが社会を拓く」との信念のもと、ボランティアの養成に力を注ぎ敷地内の古民家はボランティア研修所として開放され、年間1,000人のボランティアが訪れ、障がい者理解活動を行っている。約27年にわたる活動。

(推薦者：小林 普子)

理事長

中島 さよ子

「社会貢献者表彰の栄に浴して」

この度は、名誉ある社会貢献者表彰の栄に浴し心より感謝申し上げます。

社会福祉法人太陽福祉協会の創設者中島正清が知的障害を持つ方とご家族のご苦勞を知り、施設づくりを決意したのは1975年のことでした。計画から建設まで10年の年月を必要としましたが、その間、多くのボランティアに支えられ日の出太陽の家は誕生しました。「若い人が障害を持った人たちと1日でも行動を共にする機会があれば、彼らが親になったとき、障害を持った人たちに優しく接することのできる世の中を作ってくれるはずだ」「(障害を持った) この子たちは社会の役に立てる役目が必ずあるはずだ。みんなの能力を引き出し、一人ひとりが太陽のように輝ける人生を送らせてあげたい」創設者は7年前に他界しましたが、創設者の遺志を継ぎ、だれもが太陽のように輝いて生きられる世の中を作りたいと微力ながら努力してまいりました。創設から27年が経ち、たくさんの人に支えられ利用者は元気に生活しています。重度障害を持ちながらも「自分たちは世の中の役に立てることがあるはずだ」と農作業や陶芸、山作業などに取り組んでおります。

今回、社会貢献者表彰をいただき、利用者、職員はじめ関係者の大きな励みになっております。創設者も天国できっと喜んでいと思います。これからも、一人ひとりが太陽のように輝きながら生きられる社会づくりを目指して歩んでまいります。ありがとうございました。

理事長 中島 さよ子



▲ EM ボカシ作成



▲ ボランティア研修施設「武家屋敷」



▲ 障害者支援施設日の出太陽の家



▲ 日の出太陽の家開設10周年記念で創設者中島正清氏と



▲ 土練作業



▲ 陶芸

水谷 和孝



愛知県

平成2年、保育所で子どもたちとかかわるボランティア活動を契機に、子どもから高齢者まで幅広い世代の方が人と人との「絆」が深まる様々な活動を支援していくうちに「障がいの有無を問われることなく、誰でも同じ条件で安全に楽しむことのできるニュースポーツ」の有効性について着目し、同12年に「日本ニュースポーツ研究会」を仲間と設立した。「ファミリースポーツ広場」、「50歳からの健康教室」、「障がい者と健常者とのスポーツ交流の日」、「ふれあい教室」など数多くの事業依頼を受け、スポーツボランティアとして講師を務める。24年前に始まったボランティア活動は、現在では高い専門性を持ち合せた幅広い活動になっている。

(推薦者：亀山 明日香)

私が、これまで様々な活動が続ける中で大切にしてきたテーマは「絆」です。人と人とが笑顔でふれあえる時間を大切にしています。

活動のきっかけは、今から約24年前、地域の社会福祉協議会が主催する「サマーボランティアスクール」で保育所の子どもたちと関わる活動に参加したことです。このボランティア活動を契機に、子どもから高齢者まで幅広い世代の方が人と人との「絆」が深まる様々な活動を支援してきました。

現代における日本の社会問題のひとつとして「人と人とのコミュニケーション不足」や「運動不足」があげられます。この問題は人間（ヒト）の健全な発達を保証するためにも、喫緊の課題であると考えています。この課題から脱却するには、「価値を持つ健全としての運動やあそび」が必要になります。

このような状況の中、ニュースポーツは「運動」と「あそび」の両面の要素を含めたものであり、この課題を解決する有効なアイテムのひとつであると考えています。日本におけるニュースポーツの捉え方は諸説ありますが、私の考えるニュースポーツは次の通りです。

ニュースポーツとは、「楽しさ」を追究するという基本理念のもと「いつでも、どこでも、誰でもそして誰とも同じ条件で安全に楽しむことができるスポーツ」。つまり、これまでのスポーツとは考え方を異とした新しい考え方のスポーツ＝ニュー（コンセプト）スポーツです。

この考え方を基にしたニュースポーツ活動は、ひとつのルールにしばられることなく、「みんなが同じ」ということをモットーに新しいルールを創っていく可能性を持っているのです。また、この活動を通して、人への「思いやり」が生まれ、育ち、さらに「創造性」を豊にしていくものであると考えるのです。

「おもてなし」の国、日本では2020年に東京オリンピック、パラリンピックの開催

が計画されています。この2020年をひとつの目標に、いろいろな形でニュースポーツの考え方が広がるように微力ながら活動を続けていきたいと思えます。

末尾に、現在、地方公務員という職に就きながら土・日曜日などの休みの日や勤務後の夜間帯を利用して活動を続けることができたのは、職場の皆様、代表を務める日本ニュースポーツ研究会の仲間達、各種所属団体の皆様、そして家族をはじめ多くの皆様の暖かいご支援の賜物であると感謝しております。ありがとうございました。

～絆～



▲スポーツ推進委員さんの研修会で講師をつとめる様子



▲世代をこえてニュースポーツ「フロートR」で楽しむ様子



▲ファミリースポーツ教室の様子



▲老人クラブスポーツ大会での様子



▲福祉系専門学校での特別講座での様子

大島町消防団



東京都

平成25年10月16日、台風26号によって東京都大島町では大雨と強風、濁流で民家が押し流されるなどの大災害が発生した。都の消防や自衛隊等の救援隊が到着する前に同町の消防団320名が結集して自主救援活動を行い、分担された区域の住民の避難を援助した。自宅や家族が危険に晒された団員も多く、災害発生から一週間殆ど不眠不休で活動した団員も多かった。

(推薦者：内山 清一／橋本 光／大島町長 川島 理史)

団長
吉田 喜重

「平成26年度社会貢献者表彰式典を終えて」

この度、私ども大島町消防団は平成25年10月16日に発生した台風26号による大規模災害での活動に対して、社会貢献の功績ということで表彰していただきました。

式典では、安倍昭恵会長のご挨拶につづき、瑤子女王殿下にお言葉をいただきました。また、内館牧子表彰選考委員により選考の経緯についてのご説明をいただきました。

本当に広い分野の方々が表彰されていることに驚きました。はじめて知る活動も数多くあり、その中で私ども大島町消防団が社会貢献ということで表彰していただいたことに改めて感謝申し上げますとともに、本当に光栄に存じます。

私たちの暮らす大島町は東京都の離島としては比較的恵まれた環境にあると思えます。

しかしながら、離島ですから大規模な災害が発生した時は孤立することが考えられます。

さらには、高齢化による人口の減少が深刻な状況にあり、団員の確保にも苦慮しているところです。この度の表彰は大島町消防団への激励と受け止め、今後発生が予想されている東海、東南海地震をはじめとする地震災害、年々強力になっている台風への対応や三原山の噴火などについても、島民の生命、財産を守るべく、行政との連携を密にしてより一層の団結力を持って臨みたいと思います。

本日は本当にありがとうございました。

団長 吉田 喜重



▲泥流で樹木が住宅地へ 片づける消防団員

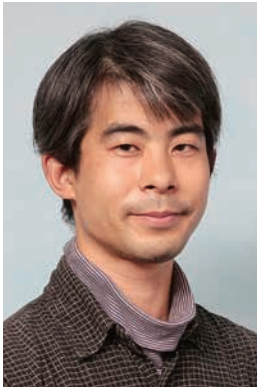


▲倒壊家屋の整理をする消防団員



▲倒木類を搬出する消防団員

NPO 法人 福島の子どもたち香川へおいでプロジェクト



香川県

平成23年の8月から福島及びその近県の放射能の不安を抱えている親子を香川に招いて自然の中で元気を取り戻してもらう活動をしている。長期休暇の際には10泊～11泊の保養キャンプを行ない、これまでに約350人を受け入れた。また生活用品の揃った民間住宅を借り上げ、年間を通じての保養で64家族196人を迎えている。さらに香川へ移住する家族もあり、就労・就学支援や交流支援、「福島と向き合う講演会」の開催などを行っている。

(推薦者：中井 聡)

理事長
伊藤 洋

この度は表彰賜りまして光栄でした。感謝申し上げます。

NPO 法人福島の子どもたち香川へおいでプロジェクトは、2011年3月11日の東日本大震災に伴う原発事故の影響で、放射能への不安を抱えて暮らす親子を、自然豊かな香川に迎え、のびのびと過ごしてもらいたいという思いから始まりました。

たくさんの方の気持ちと志によって成り立っているボランティア活動であり、今まで活動を支えていただいたみなさまの行動の集積がこのような評価につながったものと考えています。あらためて関係各位に敬意を込めまして、これまでのご協力に謝意を表させていただきたいと存じます。

受賞後も、2014年12月24日から4泊5日の間、福島県西郷村との共同事業として、6年生62名の受け入れを行いました。その後、冬休みの保養として、民間借上げ住宅での受け入れを行うとともに、移住相談も福島と東京、それぞれ一家族から承り、住居や学校、就職、引越し、それにとりまなう家具家電品の支給や手配などの具体的相談に対応する日々です。

また同12月23日には日経新聞などで、事故直後の1巡目の検査では「異常なし」とされた子供4人が、4月から始まった2巡目の検査で甲状腺がんの疑いと診断されたことが報道されました（福島県の県民健康調査事業による）。低線量の被曝による健康への影響は現代の医学でも不明とされており、子どもたち、お父さん、お母さんの不安は続いています。私たちの力は小さいですが、時と共に変化する原発事故被害者のみなさんのお気持ちに寄り添うということがどういうことなのか、考えながら歩んでいけたらと思っております。

表彰式典ではそれぞれの形で活動されるみなさまにお会いでき、社会の各所で大きな働きをされていることに、励まされました。このような機会を設けて下さった、財

団体関係者のみなさまに感謝の意を表させていただくとともに、受賞者のみなさまの姿をお手本とさせていただきつつ、今後とも鋭意活動していきたい所存です。ご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。
理事長 伊藤 洋



▲地域交流イベントで焼きそば（2013年春）
福島の子どもたちが大活躍



▲カヤックできた！（2012夏）
プラスチック段ボールを使ってカヤックを手作り



▲地域交流イベントで全員集合（2013年春）
徳島の阿波踊りの人たちも来てくださった地域交流イベント



▲初めての海水浴（2011年夏）
初めての海水浴は瀬戸の海で



▲手づくりの凧あげ（2011年冬）
書初めて書いた「絆」の凧あげ

藤田 裕喜／藤田 孝子



宮城県

宮城県気仙沼市で新聞販売所を営んでおり、開店10年を機に自ら編集したコミュニティ紙「ふれあい交差点」を創刊し毎月1回新聞に折り込み地域読者に配布している。東日本大震災発生1週間後には連日「ふれあい交差点災害特別号」を発行して安否情報をはじめ住民が最も必要としている情報を掲載し避難所を含め6,500～7,000部を配布し、復旧・復興事業の重要な情報源となった。平成26年3月22日現在、330号を発行している。

(推薦者：公益社団法人 隊友会 宮城県隊友会)

ミニコミ紙「ふれあい交差点」災害特別号

この度は荣誉ある賞をいただき、編集室一同、心から感謝申し上げます。また、表彰式には瑤子女王殿下のご臨席並びにお言葉を賜り大変感激いたしました。私たちは、この度の受賞を、震災に関わることであるが故に心から喜ばしいものではないことを踏まえた上で状況と活動内容を書きたいと思います。

東日本大震災は人知をはるかに超えたものでしたが、震災後の被災者の様子は世界が認めるように大きな混乱もなく冷静に避難所の開設や救護活動が行われ、これは日本人が自然と共に生きてきたことの証しと思われました。震災の翌日には夜通し走って駆け付けた東京消防庁をはじめ、各地から消防車などが応援に入り救護活動が行われました。さらに自衛隊も翌日には被災地に入り組織的な活動を開始し、被災後の市民に元気とやる気を起こさせてくれました。

被災直後、私たちは地区内の避難所を回り新聞販売店として何ができるかを考えました。避難所では多くの人達が安否情報等いま最も必要な情報を求めていましたが、着の身着のまま逃げ、交通手段もないためじっと待つよりほかありませんでした。テレビ・ラジオ、新聞も含め身近な情報がなかなか得られない状況の中、携帯電話もなかったのが大変でした。しかし、ほどなく各避難所や公的なところには、紙に書かれたいろいろな情報が数多く貼りだされるようになりました。大事なことが沢山ありましたが、自宅で待機している市民は交通手段もないためどこに行けば何があるか、知る由もありませんでした。

新聞は店になかなか届かず、ようやく震災後5日目(16日)に店着しました。その日は避難所を中心に配達、次の日からガソリンを確保できないときは個別配達が出来ない旨を断りつつ、被災しないお客さんを安否確認しながら届けました。当初、避難所には皆さんで回し読みするぐらいしか届けられませんでした。被災者の方々は早

朝の暗い中皆さん整然と並んで待っておられ、胸を熱くしました。

復活した戸別配達網を生かして市民に情報を共有して頂こうと、私たちは直ちに「ふれあい交差点災害特別号」(B4裏表使用)の発行を決断し、「ガンバろう気仙沼! 負けないぞ気仙沼!」を合言葉に、家族総動員で手分けしながら、取材と手づくりの編集そして毎日6千部を超す紙とインクの確保に奔走しました。第1号(18日付)は手書き、第2号からは編集集中に電気が通じたのでパソコンに変わりました。無我夢中で100号までは連日発行、その後状況の変化に伴い内容と発行間隔を変えながら、平成26年12月20日現在、370号に至っております。復旧復興はまだまだこれからですが、今後も人々の元気やまちづくりに関わる市民目線の情報を発信していきたいと考えています。



▲「交差点」編集会議 100号まで連日発行



▲ガレキ撤去後の消毒作業等の現地取材



▲発行のきっかけになった避難所の情報の山(震災直後)



▲交差点で自衛隊の帰路を数百名の市民が感謝の気持ちで見送った



▲被災後再開を決意した業者を取材

福住町町内会



宮城県

宮城県仙台市宮城野区の福住町の417世帯が加入している町内会で、昭和61年の豪雨災害を契機に「日本一災害に強い町内会」を目指してきた。災害対応チームを結成し大規模な防災訓練の実施、防災マニュアルの整備を行い、尾花沢市や小千谷市など他県の自治体の町内会と民間レベルの相互助け合いを目的に「災害時相互協力協定」を締結していた。東日本大震災発生時にはいち早くマニュアルに沿って行動し、集会所に避難所を開設して行政の支援を待たず炊き出しを行い、近隣の避難所にも食事を届けられるほどだった。「福住町方式」は注目を集め、同町の防火・防災訓練には多くの団体が視察に訪れる。

(推薦者：震災復興支援グループ「きぼう」)

会長
菅原 康雄

この度は栄えある社会貢献の功績受賞を賜り衷心よりお礼を申し上げます。まさかこの様な立派な賞を戴けるとは思いもよらない事で、福住町町内会を代表して感謝致します。受賞後のパーティーには、町内会役員と協力者計14名の参加で祝賀ムードも最高に盛り上がりました。

さて、受賞戴きました仙台市宮城野区福住町町内会は、東日本大震災が起きる8年前から巨大災害に備える為の防災に力を注ぎ、後に「福住町方式」と呼ばれる独自の防災組織を作りました。公的機関を頼らず、町民自らの自主防災は、住民400世帯、1,000名の名簿を約2ヶ月で完成させ、又、防災マニュアルをはじめ、減災に徹する姿勢は各マスコミに取り上げられました。会長1名に12名の副会長で誰が不在でも災害に対応できる様に訓練しています。年1回の防火防災訓練には他県からの協力者、見学者が沢山来られます。小・中学生が参加して、これは授業扱い。翌日代休となります。訓練が行われる福住町公園には、テント20張り、参加人数500名。町内会行事は、2日に渡る夏祭りを始め灯籠流しと花火大会、敬老祝賀会、早朝町内清掃、子供お別れ会、公園草刈り清掃、梅田川草刈り清掃などがありますが、老若男女大勢の参加者で賑わいます。

東日本大震災では、福住町の側面を流れる梅田川が溢れる寸前で、津波の被害は免れました。しかし震度6強の地震でライフラインは断たれました。余震に脅える町民は当夜から170名、内100名は町内会集会所に集まり、日頃より備え訓練で培われていた作業を開始し、暗闇を照らす灯り、暖をとるストーブ、毛布、暖かい三度の食事で町民を守りました。食料が尽きた4日目の朝、震災より以前に結んでいた「災害時相互協力協定」の尾花沢市と鶴子地区区長会の皆様あるいは交流のあった小千谷市池ヶ原地区の皆様など他県近隣から続々とトラックで食料が集会所に運ばれました。地獄

にあって仏とはこの事と涙が出る程感激しました。支援物資は集会所に収まり切れず、溢れる生活物資は、津波被害に苦しむ沿岸部へ送ることを決意しました。志をいち早く理解し協力して下さった当時の仙台市高砂市民センターの浅見健一館長と共に、福住町町内会役員は一丸となって東北一円を毎日回りました。公的支援の届かない町や個人を探して3年間で140ヶ所以上となりました。

今日では動物ふれあいなど様々なメンタルヘルスケアに全力投球していますが、私たちの支援活動は、応急仮設住宅に残る最後のお一人まで続ける覚悟しております。

会長 菅原 康雄



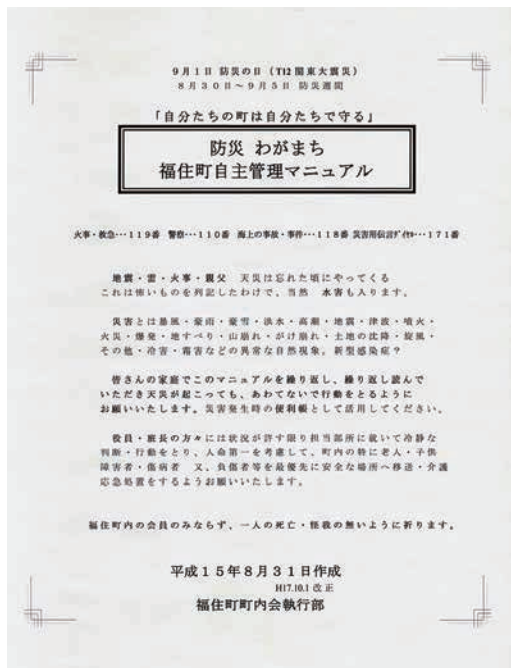
▲石巻の小学校に提供したランドセル



▲石巻市北上町の市営避難所へ頂いた物資を提供



▲大船渡の避難所へ支援物資を提供



▲福住町防災マニュアル



▲東松島町月浜の避難所にて動物の検診

NPO 法人 被災者応援 愛知ボランティアセンター



愛知県

愛知県のNPO法人。東日本大震災では1万人が提供した新品衣類30万点をのべ3千人のボランティアで6千箱に仕分けし石巻市で提供。被災地ボラは2014年9月で第124回、のべ8千人が参加。石巻市十八成浜で瓦礫撤去後、仮設から孤独死を出さないお手伝いをと、約150食のお弁当を作り、被災者と一緒に食事をする等の活動を実施。同地区の被災者の健康状態は他地区よりよいと市職員は語る。同地区の復興にも寄与。震災孤児遺児応援活動も展開。3年間にのべ3千人の孤児遺児に総額1.9億円の応援金を贈り、孤児遺児と愛知の学生の交流活動も実施。途上国の大災害被災者応援活動も展開。昨秋の台風30号で甚大な被害を受けた比キナタルカン島に衣類3万5千着を提供、島内4校に応急仮設教室6棟を建築。現地スタッフを雇用し、今後も継続して応援する。

(推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団)

理事長

久田 光政

12月、私はフィリピン・セブ島の北西にあるバンタヤン島サンタフェ自治体キナタルカン島を訪問しました。定期航路のないキナタルカン島へは漁船をチャーターして渡らなければなりません。2013年秋、フィリピンを襲った台風30号。人口約8,000人のキナタルカン島は90%の家屋が全半壊しました。

私がキナタルカン島を訪問するのは5回目。いろいろなご縁があり、愛知ボラセンはキナタルカン島での被災者応援活動を開始。2014年2月に35,000着の応援衣類を提供、3月には島の4つの学校にそれぞれ1棟ずつ応急仮設教室4棟を建て、さらに8月にはそのうち校舎が全壊した2校にもう1棟ずつの応急仮設教室を建築しました。

愛知ボラセンのキナタルカン島での活動は緊急時応援活動から復興活動へと移行してきました。2015年1月8日からは「キナタルカン食堂」を開始する予定です。電気のないこの島では、冷蔵庫で食糧を保存することはできません。

現地スタッフのルーさんが島のお母さんたち約60人を「キナタルカン食堂」メンバーとして組織。メンバーの家で野菜栽培や豚の飼育を奨励し、「キナタルカン食堂」でその野菜や豚肉を使ってお惣菜を作り販売します。うまくまわっていけば、島民の栄養状態を改善することと、メンバーに給料を払うことができます。

サンタフェ自治体首長のホセ・エスナガ氏からは「キナタルカン食堂」に協力すると約束を頂きました。さらにホセ首長には10年間はキナタルカン島で応援活動を続けるつもりであることをお伝えしています。

12月中旬に、西アフリカのエボラ出血熱の被災国で来年3月までに100万人が飢餓、と国連発表がありました。愛知ボラセンは愛知県高校生フェスティバル実行委員会と協力して、高校3年生が卒業時に返却される非常食を1万食以上集め、被災地の学校

に贈る準備を開始しました。ここでも一過性の活動にすることなく、継続的な応援を続けるつもりです。

宮城県石巻市牡鹿半島十八成浜では、年末には餅つき大会、新春3日にも年賀ボランティアを実施しました。十八成浜では1,000本の日本一のアーモンド苑を核とした桃源郷プロジェクトも現実のものにし、さらに途上国の被災地の応援活動を広げ、社会貢献支援財団の期待にお応えできるような活動を今後も続けて参ります。引き続きご指導を賜りますようお願い申し上げます。

理事長 久田 光政



▲くぐなり食堂調理の様子



▲気仙沼がれき撤去の様子



▲石巻がれき撤去の様子



▲被災者のおばあちゃんと



▲物資仕分けの様子

りんごラジオ



宮城県

平成23年3月11日に発生した東日本大震災から10日後に宮城県の沿岸、山元町に開局した臨時災害FM放送（臨災局）で、退職後、終の棲家として同町に移り住んでいた東北放送の元アナウンサーの高橋厚氏が、町長に提案実現し、同氏が中心になり運営を続けている。開局当初は、同町の通信機能も被災し、町民への情報が全く無い中で、町内の被災状況や安否生活、医療情報等を届けた。大震災後、東北3県で計24市町で開設され、被災地の助けになった臨災局は、免許の更新をせず閉局する局も出ているが、その後もりんごラジオは、町長以下行政側の復興についての話や町民の声を届ける等、地域の事は、地域でやろうという目標で町内の復興に向け放送による活動を続けている。

（推薦者：公益財団法人 社会貢献支援財団）

局長
高橋 厚

この度は素晴らしい栄えある表彰を賜り誠にありがとうございました。

3つの感激に包まれ暫くは何とも至福な思いに浸った2日間でした。

1つ目は、各受賞者の素晴らしい功績。会場内には今ここに多くの仏様、神様がいと述べていた人がいましたが果たされた功績の内容を知るにつれ胸が熱くなり、感極まるものがありました。

2つ目は、会長に就任された安倍昭恵さんは2011年東日本大震災の震災後2か月足らずで被災地を激励に回り、私達の山元町災害復興ラジオにもゲスト出演して下さいました。表彰式のステージ上でその時の記念写真が大きく映し出され、写真をじっとご覧になっている様子を見て嬉しかったです。

ご主人の安倍晋三氏にもその1か月程前にご出演頂きました。

表彰後、会長は大勢と個別撮影の際、私もその長い列に加わり挨拶とその時の話をしたら、思いがけず会長の方から握手の手を差し出して下さいました。実に嬉しい瞬間でした。

3つ目は、帝国ホテルで私の父親がフランス料理を勉強したことを思い出し感慨深いものがありました。

今回の表彰は地元の新聞や町の広報誌にも写真入りで掲載され、町議会の中でも伝えられ町民や多くの方からも賛辞を頂きました。

頂戴した賞金の一部は取り敢えず町の子育て関係の分野に寄附させて頂きました。

大震災から3年10ヶ月、町は人口減少、高齢化問題など抱えながらも着々と復興に向かっている最中。今、新しい市街地の工事に取り組んで完成を目指しています。

家の再建が済んで平常の生活を取り戻しつつある人、不安を抱えてまだ仮設暮らしの続く人など様々の状況の中、皆一様に震災で受けた心のダメージはなかなか癒える

ものではありません。そんな中、明日に向かって頑張っている人も大勢います。

震災から10日後に開局してから半年間は休むことなく毎日、朝7時から夜8時近くまで町民の必要とする情報を放送することに徹しました。放送内容は今でも自主制作のみで町の情報、町議会の生中継、「すみずみ中継」、いわゆる生中継で町の復興の状況、町民の生活の様子などを伝えています。

災害復興ラジオ局としてのりんごラジオの役目を果たすべく今尚、町民のためのラジオとして軸足を揺るぐことなく閉局という限りある時までしっかりと放送を全うしていこうと思えます。

局長 高橋 厚



▲りんごラジオ開局2011年3月21日庁舎内1階



▲安倍晋三氏



▲子供達が生出演するコーナー



▲昭恵さん



▲東日本大震災 月命日の黙とう 生放送中の中で

特定非営利活動法人 阪神高齢者・障害者支援ネットワーク



理事
宇都 幸子

兵庫県

平成7年の阪神淡路大震災発生後、高齢者と障がい者支援のために結成され、福祉避難所を開設し、その後被災地の状況の変化と共に、仮設住宅支援を24時間体制で実施、仮設住宅地域見守り連絡会を発足させた。同11年には仮設住宅内にグループハウスを開設し、認知症やアルコール依存症の人の改善と復興住宅への転居をサポートする活動を行った。仮設住宅が解消された後、それまでの活動で検証された課題を解決するため、デイサービス、グループハウスを開設し活動を継続、地域の寄りあい所も併設し、同16年にNPO法人認定を受け、神戸市の委託事業として「生きがい対応型デイサービス」の活動を継続している。東日本大震災では、気仙沼市内の避難所にて支援を行い、同年9月より仮設住宅の自立支援を継続的に行い、要援護者や子どもたちへの訪問、必要に応じて医師や専門家へ繋ぐ活動などを行っている。現在も仮設住宅での生活を余儀なくされている人々や子どもの心のケアに積極的に取り組んでいる。

(推薦者：公益社団法人 兵庫県看護協会)

この度は、私ども阪神高齢者・障害者支援ネットワークに対しまして荣誉ある表彰をいただきましたことに心よりお礼を申し上げますと共に、阪神・淡路大震災から20年にわたる自道な活動が評価をしていただけたことにスタッフ一同何よりのことと喜んでおります。

また、私どもの活動を常に暖かく見守り、共に手を携えて歩んでくださり、この大きな賞にご推薦下さいました兵庫県看護協会に深く感謝を申し上げます。

2015年1月17日にはあの阪神・淡路大震災から満20周年をむかえます。震災当日、医療・福祉関係者、マスコミ人が中心となって支援グループを立ち上げ、避難所支援を行い高齢者や障がい者、虚弱者のための医療付避難所を創りました。現在の福祉避難所の原型です。

その後、仮設住宅・復興住宅支援、地域福祉の構築にと活動を続けてきました。その間、国内外を問わず自然大災害が頻発し、本年9月24日に他界いたしました理事長の黒田裕子はその都度支援に出かけました。東日本大震災でも翌日の3月12日には現地入りし、現状把握に努め帰神してから医薬品を集め現地へ送り届けたのを皮切りに、宮城県震災復興本部の指示に従い気仙沼市面瀬中学校避難所（体育館）における24時間体制の支援体制を組みました。現在も同中学校グラウンドに建てられた仮設住宅に拠点を置き、365日24時間体制の見守りを続けています。

神戸と気仙沼では土地柄、文化、風土など異なる所は沢山あります。でも“被災した”という事実は変わりません。神戸での災害復興支援の経験はそれ以後の大災害における支援体制への大きな下敷きとなっています。あくまでも下敷きとしてその上に現地に相応しい支援のあり方を組み立てるのが支援ネットのやり方です。

12月1日の表彰式は厳粛な中にも暖かい雰囲気のある素晴らしい式典でした。また全国から集まった団体の報告は同じ活動団体としても大変勉強になるものでした。同時に感動的でもありました。

人と人が暖かい気持ちで繋がりをあえたとき、深い感動と生きることへの大きな希望が改めて生まれるものであることを再確認した一日となりました。感謝。

理事 宇都 幸子



▲西神第7仮設住宅運動会 阪神淡路大震災



▲神戸グループハウスとミニデイサービス実施



▲気仙沼市避難所面瀬中学校体育館にて子供のケア



▲面瀬中学校仮設住宅にて春まつり開催



▲在宅の高齢者をケア 東日本大震災



▲伊川谷工房 毎年1月17日追悼行事開催 阪神淡路大震災